
ビオン：イントロダクション

ニコラ・エイベルーハーシュ著

権 成鉉監修

南澤淳美, 権 淳嗣訳

岩崎学術出版社, A5判 176 頁, 3,850 円, 2025 年 11 月刊

(きしろメンタルクリニック／代官山心理・分析オフィス)

福本 修

原書は、Karnac Books から独立して 2018 年に創立された Phoenix Publishing House による Introduction シリーズ中の一冊である。Bion を取り上げた本書は、“Bion : 365 Quotes” (Routledge, 2019) の著者として知られる Nicola Abel-Hirsch が、彼の仕事と著作をほぼ年代順に概説したものである。著作の展開を生涯に沿って見て行くのは一般的な構成で、“The Complete Works of W. R. Bion” (Routledge, 2014) の編集方針にも即している。彼女の前著が Bion の紹介に徹して、ほぼ引用と短い註釈からなっていたのに対して、本書で著者は、Bion が磨き上げたさまざまな概念と着想を、専門家が機能するのに不可欠な

ものとして紹介しようとしている。

Bionの人生経験を参照しつつ彼の著作を読むと、彼の概念や問題意識は近づきやすくなる。Grinberg, Lらの“Introduction to the Work of Bion” (Clunie Press, 1975)は、自伝的著作が未刊行だったためにBionの集団経験から論じ始めるしかなく、辞典を順番に読むような読み難さがあった。Bléandonu, Gによる“Wilfred Bion: His life and works, 1897-1979” (Free Association Books, 1994)は、Bionの経験と思考の展開を押さえた大変明解な著作だが、個々のテキストおよび概念の読解には深く立ち入っていない。

本書も、量的な制約から彼の主要な著作や論文についても、抜粋と要約がスケッチのように続く。しかしNicolaによるBionの症例記述の解説は、一般に類型的になりがちところで、臨床的知見に満ちていて自然である。Winnicottの流れとの対比では、死の本能に関して自分がKlein寄りであることを明言している。数あるセミナーのさまざまなエピソードの中でも、「いかだの寓話」(『イタリア・セミナー』より)を引用しているのは印象的である。彼女はHinshelwoodらとの共同研究に触れて、Bionは1950年代から1960年代初期、当時思われていたほどクライン派的ではなく、1965年以降の臨床では、思われている以上にクライン派的だったという。

多くの現代の論者たちのように、NicolaはBionの戦争経験を取り上げ、控えめな疑問形でその後遺症に触れている (Did he suffer what is today called PTSD?). しかし本当のBionらしさは、その後の臨床経験の深さと心が働かないmindless状態についての精神分析的な探究によって、晩年の自伝的著作が、驚くほど直接的な記述となっているところにある。彼には、当然と受け取られていることの中にある理解不能のものに気づく能力があったがゆえに、疑問を被らざるを得ない——これは本書のもう一つの命題のようである。Sufferは本書後半ではマタイによる福音書における語用 (“Suffer little children”) と結びつけられ、宗教的・実存的次元の広がりを見せる。これは医学的頂点から、宗教的・実存的頂点への移行あるいは進展である。では、精神分析的頂点とは何か。その進展自体を成り立たせるものだろうか。

Nicolaは、Bionが“container/contained”の布置を人間の発達を中心に据えたとしている。彼の思考

がそれを巡って一貫していたことは確かであり、つねにcontainerを求めてもいたようである。それは自己探求であり、自己鍛錬の過程である。Gridは、端的に「自己スーパーヴィジョンのための装置」であると指摘される。自伝や戯曲風著作の執筆も、Bionにはその一環だったことだろう。彼が願うのは、読者自身が、精神分析の探求を進めるための力を身につけられるようになることである。

NicolaはBionの記述の伏流を明示したことで、本書を一貫性のあるBionを提示する、入門や概説を超えたものになっている。

原書: Nicola Abel-Hirsch: Bion: An introduction